

町民文芸

只見短歌会　令和八年十月詠草

扇風機のめくりくれしか日記帳閉じむとすれば空白の有り　目黒　富子

お手玉を子らと遊ぶを頼まれし我も夢中になりて過ごすも　関谷登美子

色づきのはじめのもみぢ見つけたる赤くなったと告ぐる子のこゑ　立花　奏音

平日の朝来し孫に訳問へば学級閉鎖と胸張りて言ふ　新国由紀子

収穫の終はりし朝の田の畔に白鷺降りて餌を啄む　渡部ヨリ子

只見俳句会　十月定例会

竜胆（りんどう）に励まされしや冬覚悟　真理子

客来しと思えば銀杏落ちる音　睦子

赤とんぼ窓の隙間に迷い住む　湯上がりに一人眺むる秋の月　尚幸

津軽路の真っ赤な林檎描く画帳　雨強き二百二十日の車窓かな　理恵子

ペンキ塗る屋根の回りは赤とんぼ　雲の下間近に見ゆる紅葉かな　恒夫

亀虫の戸隠れの術見事なる　吾が村を一望しての秋思かな　一恵

虫すだく昔語りの鬼ばんば　靴投げに夢中なる子等山装う　修一

秋高し傘二本持つ通学児　鈴虫と一緒に届く宅急便　信

秋澄むや兵眠る砦かな　小諸なる藤村偲ぶ鰯雲　都

畑隅にどさと捨てある秋のなす　秋の暮れもうすぐ母の年となる　味代子

犬走り小雨に光る苔の花　荒屋（あばらや）の折り折りきしむちちろ虫